



スイス・マッターホルン 12 7月18日撮影

短信発行に寄せて 理事長 古野淳

学生の夏山合宿は剣沢で行われ、入部した1年生6人全員が参加しました。チーフリーダー飯田がインド遠征参加のため、上級生は関、横山、山浦の3人およびOBの力を借りての合宿となりました。雪上訓練は伝統的に内蔵ノ助カールで行いましたが、今考えても国内で最適な雪渓訓練場だと思います。クライミングの技術は日進月歩ですが、雪上の技術は日本独特の自然環境から導かれた技術でもあり、大谷監督の指導はたいへんありがたいものでした。

しかしながら1年生4人がケガで途中下山や下山後病院に行くことになり今後の反省点となりました。

近年、多くの山岳部で部員が増えてきました。学生や父兄に話を聞いてみると中学高校で登山をやってきた者、子供の頃から家族で登山を楽しんできた者等も多く、山ガールのようなブームとは別に親の世代のライフスタイルの変化、自然に対する理解の変化が大きいのではないかと感じることがあります。

春には学生たちがネパールの遠征を計画中です。限られた時間とメンバーで多くは望めませんが社会人になるまえに貴重な体験を積むことは大きな財産になることでしょう。最大限バックアップしてあげたいと思います。

JACでも山岳部同様、若者の入部が増えてきました。かつての伝統的な社会人山岳会のように1から技術を育てる方針を打ち立てて時間をかけて大事に育てています。JACの長い歴史の中でも初めての試みです。学生部はインドの未踏峰に5大学の学生が参加し、学生だけで未踏峰挑戦を行っています。そんななか日中韓友好登山の継続に疑問の声が出始めました。中国と韓国とはあきらかに登山文化が異なっており、国際交流の難しさが現実のものとなっています。19世紀ヨーロッパから始まった近代登山の精神を受け入れる歴史(余裕)のなかった2国はめざましい経済発展が背景で登山ブームが訪れており、商業主義の中国と、国策の韓国との狭間で苦悩しております。

オリンピックは華やかに成功裏に終了しましたが、日本の敗戦記念日が近づくとその時代に生きた山の先輩方の思いを想像することがあります。剣沢の雪渓を歩きたい、雪の穂高に登りたい、と時代は変わっても、年齢を重ねてもその気持ちは永遠です。

学生部ザンスカール登山隊には皆様からの多額の寄付をいただき感謝の念に耐えません。ひとまり大きくなって日焼けした学生たちを出迎える日を楽しみにしています。

2012年夏山合宿報告書

山 域) 北アルプス 剣沢定着 + 後半縦走 (立山 ~ 薬師 ~ 雲ノ平 ~ 槍 ~ 新穂高温泉縦走)

期 間) 平成24年8月4日(日) ~ 18日(土)

メンバー) 4年 CL 飯田祐一郎

3年 SL 関洸哉 L 横山 裕

2 年 山浦祥吾

1 年 池田祥子、賀来素直、金原守人、須郷直也、田仲航、小松周平

OB 大谷直弘 本多直也 高木大地



写真右上：雪上確保訓練：スリップ！滑落する山浦（2年）を確保する賀来（1年）

右下：分散行動3日目劔頂上

左上：劔沢定着合宿BC

左下：劔沢上部雪渓の訓練場(2日目)

行動概要

8月4日(土)移動日	新宿発高速バス発～富山
8月5日(日)	室堂～雷鳥沢～劔沢CS
8月6日(月)	分散行動1日目：八つ峰 峰Cフェース剣稜会ルートへ2パーティー、劔本峰へ一般道から1パーティーを分散行動で各々出す。各々無事行動を終え劔沢CSに帰着。
8月7日(火)	分散行動2日目：源治郎尾根、雄山に2隊出すものの源治郎隊は途中でタイムアップの為引き返す、雄山隊は入山で足を痛めた1年の具合が良くなく、別山までの行動で引き返す。
8月8日(水)	分散行動3日目：全員にて劔本峰へ一般道から登頂。
8月9日(木)	雪渓訓練1日目：内蔵助カールにて雪上訓練。直登・直下降・斜下降・斜登高・トラバース・滑落停止・グリセードの訓練。

8月10日(金)	雪渓訓練 2 日目：劔沢上部雪渓にて雪上訓練。1 日目のおさらい、ロープワーク(確保訓練)ボディ・ビレイ、確保機を使用しての確保訓練。飯田主将はインド・ザンスカール遠征準備の為、ハシゴ谷乗越し経由で黒部ダムに下山。
8月11日(土)	劔沢CSを撤収して雷鳥沢CSに移動、明日からの後半縦走に備える。足首と足の指(爪)を痛めた1年生2名を室堂から下山させる。 明日からの後半縦走に備え、装備と食糧の再パッキングと午後から束の間の休養。
8月12日(日)	雷鳥沢CS～竜王～五色ヶ原CS 竜王の下りで1年が捻挫、室堂経由で下山させ縦走隊はそのまま五色ヶ原CSへ。 上級生2名帯同、その後本体に合流。
8月13日(月)	五色ヶ原CS～越中沢岳～スゴ乗越CS 順調に南下する。
8月14日(火)	スゴ乗越CS～薬師岳～薬師峠CS 順調に南下する。
8月15日(水) 停滞	前日1年が食当中に火傷、大事をとって太郎小屋から有峰口へ下山させる。 上級生1名を帯同させ、富山市内の病院で治療、帰京させる。
8月16日(木)	薬師峠CS～薬師沢小屋～鷲羽～三俣蓮華CS。順調に南下する。
8月17日(金)	三俣蓮華CS～双六～槍ヶ岳肩の小屋CS
8月18日(土)	槍ヶ岳肩の小屋CS～千丈乗越し～新穂高温泉 下山。

(大谷監督・記)

平成24年度 理事・評議委員会報告

4月24日(火) 千石部室(出席者：山本、原田、大谷、古野、若林、学生)

- ・2012年度総会について
- ・学生の山行報告、計画及び来春の学生海外登山について
- ・会報発行について
- ・エベレスト基金委員会について

5月29日(火) 千学部室(出席者：原田、高澤、大谷、古野、学生)

- ・総会用パンフレット内容について
- ・学生の山行報告、計画、JAC 学生部ザンスカール参加、来春の学生の海外登山
- ・暑気払いの準備について

6月26日(火) 千石フェニックス喫茶店(出席者：山本、原田、高澤、大谷、古野、若林)

- ・総会パンフ発送及び会費、ザンスカール遠征協力金、遭難対策協力金について
- ・学生の山行報告・計画(初夏合宿)及び来春の海外遠征について
- ・暑気払いの準備

7月31日(火) 千石フェニックス喫茶店(参加者：山本、高緑、原田、高澤、大谷、古野、家口)

- ・短信158号欠番について、次回は160号とする
- ・学生の山行、報告、海外遠征について
- ・JAC 学生部ザンスカール遠征計画について
- ・秋季天幕懇親会(日本山岳会上高地山岳研究所)の対応について



「アンテナ」

1) 学生の飯田祐一郎 4 年生が日本山岳会学生部ザンスカール遠征隊に参加、参加大学は日大、中央、立教、法政、三重各大学 5 名の現役学生隊。8 月 15 日に出発、未登峰のインド北部ヒマラヤに挑む。
朝日新聞 8 月 23 日 (木) 朝刊参照。

インド・ザンスカール壮行会 8 月 12 日 午後 6 時～8 時、於銀座ナイルレストラン

出席者) 西山先生、大谷監督、古野理事長、OG 若林、学生 10 名。

西山先生が、8 月 2 日に銀座の老舗カレー店にて飯田君の壮行会を開いてくださいました。飯田君の登山の成功と無事帰国を祈念して、本格カレーとビールで乾杯しました。



インドの飯田君から届いたハガキ。

日本山岳会・学生部ザンスカール隊 インド航空で出発当日 (8 月 15 日) 成田空港にて。

(8 月 17 日消印)

2) 訃報

多田勇三 OB (1961 年入部) が病氣療養中 2012 年 5 月 14 日ご逝去されました。マッキンリー等海外の山でも活躍されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

多和田忠 OB (1963 年入部) がハングライダー飛行中の事故で 5 月 19 日ご逝去されました。グリーンランド・北極遠征で活躍され、中日新聞でも本件の事故が報道されました。ご冥福をお祈り申し上げます。

山口 (旧姓草薙) 靖二 OB (1947 年入部) が 2012 年 8 月 6 日 (月) ご逝去されました。昨年秋の金時山天懇に参加され、お元気でしたが突然の訃報に言葉もありません。ご冥福をお祈り申し上げます。

連絡先 山口祥子夫人

3) OB 動向 暑気払いの返信より

- ・中川平八 OB、名簿の中川医院消去。
- ・福嶋祐二 OB、昨年は屋久島登山 3 回楽しんでます。
- ・原澤 修 OB、今年家族が増えました。
- ・森泉寿夫 OB、後期高齢者と成って 3 年、植木職人として活躍？しています。
- ・三ツ井英夫 OB、身体不調の為欠席です。

- ・岸田達明 OB、7月中旬に梅池～白馬を縦走、体力の限界を感じた。
- ・西川正雄 OB、仕事が忙しく山には行けません。磯釣りをたまに。
- ・高松雄萬 OB、尿毒症に侵され歩行困難、リハビリで近所を歩いています。
- ・大田 毅 OB、10年ぶりの岡谷勤務です。
- ・本片山数馬 OB、一昨年の OB 室堂小集会在最後、日常の歩行も苦痛になりました。

4) 住所変更

- ・大田毅 OB、新住所：〒394 - 0021 長野県岡谷市郷田1 - 4 - 5 電話)0266 - 78 - 6273

2012年(平成23年度)総会報告

5月31日、総会が開催され全ての案件が承認された。今年は、新人部員が5名(開催時点)入部され、ここ数年の総会以上に盛り上がった。現役合わせて9名となり、後1名の入部で10名の部員が今年の活動を担う。

出席者：新田、石坂、松田、山本(晃)、安田(敬)、土合、中嶋、大城、川崎、高橋(正)、高緑、柴田、神崎、山平、柄澤、中川、小嶋、平戸、原田(洋)、高澤、大谷、古野、若林、船田、高木、学生9名。



2012年 暑気払い報告

7月24日(火)今年も例年の如く暑さを払うパーティーが新橋・第一ホテルのレストラン「ラ・パソツァ」で開催された。学生9名(1名は所用で出席出来ず)も出席し、飯田主将がインド北部のザンスカール遠征参加の説明も行われ穏やかな数時間を過ごした。

出席者：石坂、山本(晃)、中嶋、大城、山平、高橋(正)、高緑、柴田、森山、山平、柄澤、中川、原田(洋)、村木、大谷、古野、若林、学生9名。



明治大学山岳部創部九十周年記念祝賀会に参加して

2012年5月26日(土)に明治大学山岳部の創部90周年祝賀会が明治大学リビティータワーにて開催され明治大学山岳部長飯田氏の挨拶から始まり、日山協の神埼会長、日本山岳会尾上会長等の関係者の挨拶が続き、今年入部された山岳部員及び現役部員(新入部員5名、現役4名)の紹介があった。日大からは山本、神埼、尾上、原田、大谷が出席、炉辺会の重鎮との懇親を深められた。最後に炉辺会々長節田氏の閉会の挨拶があり「白雲なびく・・・」を歌ってお開きと成った。(原田洋・記)

日本大学医学部山岳部創部60周年式典に参加して

2012年6月30日(土)にホテルメトロポリタン池袋にて日大医学部創部60周年式典が開催され、医学部長方山氏、山岳部長相澤氏始め、OB会々長石原氏、副会長小川氏、監督原田、等多数が出席。今年度石原氏が勇退、会長に小川氏が就任した。桜門山岳会より、山本、柴田(医学部山岳部OB)、神埼、原田、大谷、古野が出席。(原田洋・記)

温故知新

～ 山やの履歴書 ～



山岳部に属したOB・OGの方々が、学生時代をどのように過ごし、何を考えて過ごしてきたかを、短信紙面で読み知ってもらうためのコーナーです。第二回目は山口靖二OB(昭和22年入部)の寄稿・後編を掲載させていただきます。

「なんで山に登るの～後編～」

昭和22年(1947年)入部 山口靖二

山岳部部長の瀬能教授が日頃、「嫁をもらう時は山に連れてゆけ、へたばる奴はやめとけ」と諭されていたので結婚の前、妻を剣沢に連れて行った。藤橋 - 称名滝 - 七郎坂 - 追分小屋 - 天狗の小屋で一泊。小屋の天上が破れていて寝ながら星が見え風情だが、彼女は雨が降ったらどうするのか心配で寝られなかったらしい。翌日の雷鳥坂は雨だった。剣沢小屋に着いたときは、だいぶ濡れて震えていた。小屋主の文三さん(伊地知君が遭難したときに日大本部体育会より森本先生を剣沢小屋まで神山先輩帆足先輩とご案内した。以後文三さんと昵懇となった)が心配して特別に部屋を用意してくれて事なきを得たが、それ以来妻は小屋泊の山には行かなくなった。初めての山小屋が辛かったのだろうか。

剣沢では丁度、山岳部の合宿中で梅松君に会えた。彼とは、須坂商業出身の小田切さんの後輩だったことから入部前にも山行、野沢温泉でスキーなどして山岳部に勧誘したことがあり面識があった。

その時テントの中で話笑したのが梅松君との最後となった。翌年富士山で亡くなった。(富士遭難後小田切さんは悲嘆にくれ自衛隊へと隠遁した)。

脱線した話をもとに戻します

瀬能教諭が言った花嫁選びは不本意だったが、養子だからしょうがないと諦めた。しかも結婚したこの時点で山と決別させられた。

しかし、むしろ生き延びたが本音だろう。もしも山を続けていたら、いろいろなアクシデントで殺されていただろう。なぜなら山やの終着点は多くの先人達が辿った「葉隠」に似ていると思うし、私自身も大変背伸びした山行が多かったからだ。山にのめりこむのは男の美学か意地かわからないが人の運命は摩訶不思議なものである。

横須賀に住んで35年間過ぎ、1985年小脳腫瘍で倒れるまではひたすら平穩に、スキーやハイキ

ング、ゴルフ、釣り、温泉旅行、マーチャンに明け暮れた。しかしスキーだけは真面目に続けていた。1月の苗場、2月の北海道、3月の八方尾根は毎年の行事で、生き甲斐でもあった。北海道では小島八郎先輩に毎年お世話になった。

病後、山は眺めるだけとなったが、それでも松田さんの紹介でエーデルワイス、坂倉登紀子さんのヨーロッパツアーやシャモニーやカナダのトレッキングに参加させてもらった。その小脳腫瘍は平衡感覚を司る部位だった。腫瘍の切除とリハビリで3ヶ月、入院し80パーセント回復できたが、大きな変化は方向感覚機能が失っていたことであつた。しかしよくしたもので月日の経過にともないその分、勘がすごく研ぎ澄まされた。

1987年、手術2年後スキーを再開した。アンヌプリではバツケンをつけるのに下を向いていたら滑る方向が分からなくなって困った。次の年には大雪山で地元の人さえ出勤を躊躇した吹雪の中、スキーの遭難者を救い出せた。その時、姿見温泉ホテルでは一寸したヒーローとなったが、偶然かも知れないが勘の閃きは方向音痴を克服した気がした。それにもまして、父の山における権威を同行した子供にみせた快拳ともなった。しかしいまでも脳の磁石は困ったことに狂ったままだ。どうも私の方位磁石は小脳にあるらしい。

1992年62歳となったことからスキーは断念した。骨折転倒事故が怖かったし、平衡感覚失調で上手くスキーが出来なくなったことによる。しかしこれで暴走スキーに歯止めをかけたこととなった。これも病気のお陰、「塞翁が馬」だと今思っている。

スキーをやめた時ゴルフ、釣り、その他の趣味も全部捨て昔に戻って「山歩き専門」とした。本来私の登山スタイルはピークハント型だったが、これからは信仰登山スタイル型に変えた。とにかく山歩きが楽しくてよく歩いた。相棒は近くに住んでいてオールサンデーの渡辺先輩で、多く毎週水曜日だったが10年で約450全天候型の山行している。近郊の有名な山はほとんど登りつくした感じである。

だいぶ以前から、なぜ私は山に登るのか謎だった。山が私を呼んでいた。山の頂には極楽浄土があり何時の日かそれに逢える。「そこに到達したい」と私なりの巡礼の旅を続けていた。

1989年宮原さんのツアーでネパールのパシュパネパートに赴いたときの事だが、聖なる流れバクマテ河（この河は聖なるガンジスの上流）に天国への入り口を見て強烈な衝撃を受けたことがあった。

当時私には山に行かずにはいられない「何か」が長い間の疑問だった。山に駆り立てた『モノ』は何か見出せなかった。しかし、この場所にたどり着いたとき、これこそ長い間探し求めた「モノ」の正体とみえた。それは私が到着したとき二人の遺体が茶毘にふされ、また毛布に包まれた遺体が薪の上に安置されていた。その数メートル先には今まさに息を引きとらんとする老人が横たわりその家族が取り囲み死のその瞬間を待っていたかにみえた。

それは悲しむどころかこの聖地より天国より送り出せる誇らしげな姿にさえ見えた。ガイドをしてくれた大河原氏の説明によると家族はその時まで1ヶ月もここに滞在するそうだ。

茶毘に付された死者は紫煙とともに天に続く階段を登って行ったようにも見えた。やがて焼かれた骨はその場から河に流されていった。またその50メートル上流では若い夫婦が子供を聖なる流れに沐浴させていた。

この壮大な舞台バクマテ河畔はたった200メートル足らずの場所だった。

仏教の極楽絵のような場所が本当に実在していたとは信じられなかった。まさしくこの世の現世の極楽浄土と確信しこれまでの幾多の山行の到達点と思えた。

今も私の求めているものは山の頂にある。神秘的な静寂な世界、極楽浄土である。たとえこの事が他人に通じなくとも自分だけは納得していることである。

山に導いてくれた富士山。楽しさを教えてくれた日大山岳部。人との繋がりの大切さを示してくれた神山先輩。以心伝心を教えてくれた石坂先輩。多くの山の先輩、友達や森羅万象に感謝している。

今自分の一生を振り返ったとき豊かなときを与えてくれたものはやはり山登りであつた。山登りを通じてあらゆることを教えて貰った。人間性が培われたのは実に山登りを通じてであつた。山は競争がない、こつこつ歩きつづければ必ず目標に到達できる。それはすべての事柄に通じている。

そして何時も、お山の大将でいられて楽しい。この素晴らしい山岳巡礼が続けられるのは最高の人生だったと思っている。(終)

「富士登山—僕自身の昔と今」

昭和 37 年卒 高橋正彦

日大山岳部では劔岳・穂高・冬富士は三大聖地です。

小生が最初に富士登山したのは 1 年部員の 1958 年 11 月 24 日～27 日です。約半世紀前です。現在ではお金を払えば装備は何でも手に入りますが、当時は出発前日にウサギのナメシ皮を与えられ、自分の手形にわせて裁断し、タコ糸で各自が縫って作りました。このオーバーミトンは優れ物で、その後の冬山・スキー合宿・春山で凍傷にならず大変重宝しました。

朝一番に新宿駅から富士吉田駅で下車し、駅から馬返しを經由して 5 合目佐藤小屋に暗くなる頃に到着です。翌日は冰雪訓練、2 日目は夏道から頂上です。天候は快晴、南アルプスをはじめ遠くに北アルプスも見えて遠望は最高です。ところが登路は上部に行くとき大きなビー玉を敷き詰めたようなテカテカのアイスパーンとなり、アイゼンは 2～3mm しか食い込まず、ザイルも結んでいないのでつまずいたら一貫の終わりです。(確保する所がないのでザイルは使用しない) その上、独立峰ですから時々突風が吹き荒れます。風を察知したリーダーは突風と叫び、瞬時にピッケルに全体重をかけ突風体制を取り、突風の去る間、体が一瞬宙に浮く時があります。そんな事で、よく友人から日本の山で一番怖いのはどこかと聞かれれば冬富士と答えます。理由は北アルプスでもヒマラヤでも危険なところはザイルを結んで前進しますので滑落する危険は冬富士に比べれば格段安全です。こんなことで現役 4 年間、富士山に登るのは冬の山と学生時代は思っていました。

それから冬富士は登っていませんが、5 月下旬となると雪も軟くなり 10 数回登っていると思いますが今から 7 年前の 66 才の 9 月に友人 4 名と富士登山したら前夜の深酒が悪かったのか烏帽子岩(8 合目 3250m)あたりで高山病になりました。本当は下山すべきですが日本の山で高山病になるとは夢にも思っていなかったので無理して頂上に行き、お鉢巡りをして下山しました。

これがきっかけで高山病にトラウマになりしばらく富士山は避けてきました。

今年の春に偶然、河口湖在住の渡辺玉枝さん(エベレスト女性最高齢登頂者)に逢い、富士山に登っていますかと聞かれ、最近では登っていませんと答えたところ、70 才過ぎて頂上に登ると山頂の浅間神社奥宮で記帳してお神酒と扇子を頂けると聞いたので、これは何がなんでも挑戦しなくてはと思い、体力比較のため山岳部同期の鈴木馨・外林正治(途中退部)を誘い、3 名でコースも最短距離といわれる富士宮口とし、(吉田口 15km,富士宮 10km)初日(7 月 22 日)は 8 合目池田館(3250m)泊まり、翌 23 日夜中の 2 時に起床で山頂の御来光を目指して登りますが、一人がピッチ上がらず、「頑張な」と言って聞かせビスタリー・ビスタリー(ネパール語でゆっくりという意味)御来光には間に合わなかったが 3 名とも高山病にならず快晴のもと登頂出来ました。若い頃のようににはゆかないが 80 才でも挑戦したいと思います。

聞けば前日(7 月 22 日)NUAC の仲間も東北震災の高校生 70 名を連れて吉田口から登頂したとのこと、NUAC も関係者の努力では新入部員も入り久しぶりの二桁部員とのこと、安全第一でよい登山をしてくれること期待します。(2012.7.30 記)

注)冬富士は 1997 年 11 月から合宿直前に富士が積雪不足(15cm)で訓練不能となり、それ以降の冰雪合宿は八方尾根に変更となりました。

「雷に撃たれて」

平成4年卒 家口寛

今年のゴールデンウィーク（G.W）最終日5月6日、午前9時に風雪の槍ヶ岳頂上を後にトップが僕、セカンドA、シンガリBの順に3人パーティーは上高地に下山を開始した。槍ヶ岳山荘まで行けば、高速道路のように快適で安全な道を上高地まで行くだけだ。強さをました風雪のため槍ヶ岳山荘は見えないが、3人は確実に山荘に向っていた。トップの僕は、山荘まで最期の鎖場を降り、AとBが追い付くのを待っていた。その時風が強まり滑落すると危ないとの思いから鎖を持った瞬間、両手から火の玉が見え、視界が揺らぎ大きな衝撃が体を貫き力が入らず倒れた。

この山行は僕にとって11年ぶり、AとBは初めての北鎌尾根だった。入山前からG.W後半は天気が悪いとの予報が的中し、3日の入山日も雨だった。信濃大町からタクシーで高瀬ダムまで行くはずが、昨夜からの雨量が多すぎ七倉のゲートが開かない。仕方がないため徒歩で行くことにする。ゲート脇で登山届を提出する際、受付のおばちゃんに「水量が多すぎて千天出合までいけないから無理するな」と言われるが、「ダメなら帰ってきますよ」と伝え入山をした。

雨は湯俣に着くころには上がり青空が見えてきた。湯俣からは千天出合までは廃道だ。11年ぶりの廃道は荒廃が進んでいるが、昔の感と卓越したルートファインディング能力(笑い)を駆使し、千天出合の吊橋跡地の徒渉点まで川に入らずに済んだ。しかし水量は半端ではない。今までも何度かこのシーズンに北鎌には来たが、水量が一番多い。メンバーのAは「家口さん無理ですよ、渡れる気がしないから帰りましょう」と言っている。ここは何としてでも渡りきらねばチームリーダーとして面子が立たない。ズボン、パンツや靴を脱ぎ、下半身は裸となって徒渉を開始するが、雪解け水の川に入った瞬間に心が折れそうになる。頑張ってはみるがあまりの冷たさと水量に、あっさり心は折れ直ぐに岸に引き返した。その後Bが挑戦するも、水量に足をとられ倒れ全身ずぶ濡れとなり、時間切れのため幕営をする。翌4日は朝から晴れ、川の水量は全く減らないが、流れがゆるく渡れそうな箇所を見つけ徒渉を成功させた。その後順調にP2、P3と登り、その日はP4までの途中で泊まる。5日も朝は晴れ、北鎌のコル、独標と順調に進む。途中、独標を過ぎたピークに、この冬救出された学生の荷物がテントで覆われデポしてあった。デポされた荷物は、荒らされておらず多少覆っているテントに穴が開いている程度だった。荷物を持って帰りたと思うがあまりにも置いてある荷物が多く、そのままにしてその場を後にした。時間は午後2時、その頃から天候が降り始め、天場の北鎌平に着いた頃には暴風雪となる。その夜、悪天により北アルプス各山で多重遭難が起きていることがラジオから聞こえてきた。槍ヶ岳周辺では雷がバンバン落ちていた。「雷に撃たれたらどうなるんだろう?」「遠ければ、ピカと光ってゴロゴロと音が聞こえて分かるけど、直撃なら分からなく死んでるんじゃないの」など、テントの中の話題は自然と雷の話となった。その夜は、夜中暴風雪が続いていた。

最終日の6日の朝は、昨夜より勢いはおさまるが風雪は続いている、ただし雷は無くなった。気象予報では、昼になるにしたがい悪化するため、穂先を目指し行動を開始した。穂先に取りついた時には暴風雪となり、危険のためザイルを出す。風雪のため声が聞こえずピッチを細かく切り4ピッチで頂上。ザイルを束ねている途中に遠くで雷鳴が聞こえたため、早々に槍ヶ岳山荘に向けて下山を開始した。下山は、梯子、鎖を使用し、また時にはダブルアックスのクライムダウンを行い、暴風雪のため見えないが確実に山荘へは近づいていた。山荘までの最期の鎖の末端まで来たとき、僕はメンバーを待つため止まって後ろを振り向いた。セカンドのAはちょうど鎖に全体中を預けてぶら下がりながら降りていた。シンガリのBは岩陰で見えなかった。その時、風にあおられた。危険なため離れていた鎖を持った瞬間、その手から火球が見え体を衝撃が貫いて倒れた。視界は歪

み、耳は聞こえず、頭はぼ～っとし、体に全く力が入らず、両手と両足は熱いお湯が流れている感じがしていた。幸い倒れた場所は登山道が少し平らで、滑落せずに済んだ。少し経って頭が動き出すと何が起きたんだろうと考えられるようになり、落雷だと分かった瞬間に、後少しで山荘だったのという悔しさが湧いてきた。それと同時に仲間が心配となり、倒れながら周囲を探した。上からはシンガリの B が「家口さん大丈夫ですか？」と叫んでいる声が聞こえる。その声に「体が動かない、B は大丈夫か？」と返答する。B は幸いに鎖から手を放していたため、大丈夫だったとのこと。ただし A が落ちたと叫んでいる。B は A の落ちる一部始終を見ていた。A は全体重を鎖に託していたので、雷が落ちた時に鎖から弾かれるように頭を下にして落ちたらしい。下を見ると 30 メートルくらい下のガレバ場に A が横たわっている。B と 2 人で A の名前を呼ぶが、返答は無く体も動かない。あきらめずに呼ぶとピックルを持つ手を挙げた。僕はまだ体が動かず、動ける B に A の所まで行ってもらった。そのうち少し僕の体が動くようになり、這う様にガレ場を A の所まで行った。A は最初、頭を斜面の下にして倒れていたが、B が頭を斜面の上に向きを変え寝かせてくれた。A の意識は混沌しており、呼掛けてもアアアとしか言わない。また滑落時にヘルメットが外れ、頭部は裂傷、また顔面も裂傷している。脳漿は見えていないため即死は大丈夫だったと思った。ただし暴風雪は止まず寒さが厳しい。状況は最悪だったため、A が低体温症にならない様にツェルトを被せた。その頃には僕の体も多少は動けるようになり、立って歩くことが出来るまで回復していた。ツェルトを被せるのと同時にどの様に A を山荘まで救出するか考えていた。選択は 3 つ、A を 2 人で運ぶ。1 人がこの場に残り、もう 1 人が山荘に向い救助を求める。2 人とも山荘に向い救助を求める。しかし 3 つとも問題がある。僕は落雷のダメージがある体では運ぶ戦力にならない。は暴風雪のため二重遭難になる可能性がある。はこの場に残す A が不安。という具合である。そもそもよく見ると今いる場所はガレ場の末端で、その先が崖のためとても危ない。そのためまずは 2 人がかりで落ちない場所まで A を動かした。その時 A が少し歩けたため、このまま 3 人で歩いて山荘まで行くことを決意。僕と B で A を抱えながら歩き山荘に到着した。時刻は午前 10 時 50 分だった。到着したとき A は低体温症になっていたため、山荘の方達が A の濡れている服を着替えさせ、布団に寝かせ、傷の処置も行ってくれた。その後も天候は回復せず、槍ヶ岳の頂上にバンバン雷が落ちていたため、翌 7 日の朝 7 時に県警のヘリコプターが A を収容した。僕と B は上高地まで 22 キロを歩いて下り、A が収容された信州大学付属病院に見舞いと A のお父さんに謝罪をし、県警の山岳警備隊に事故報告と謝罪と御礼に行った後に家路についた。家では小学校 2 年生の娘に「パパ、雷に撃たれた時、骨が見えた？」と聞かれた。

今回の雷は直撃ではなく、頂上に落ちた雷の電気が鎖を伝って来たと思われる。鎖を持っていた手は火傷、毛手は焼けて大きな穴が開いていた。ただ不思議なことにオーバーミトンは何ともなかった。信州大の医者は手から手に電気が抜けたため死ななくて済んだとの事でした。(完)



編集後記

訂正：前号の短信は本来、158号であったところを間違えて159号として発刊してしまいました。本号を160号とした為、短信158号は編集側のミスにより、欠番として扱わせていただきます。この場をお借りしてお詫び申し上げます。

寄稿「なんで山に登るの」は、故山口靖二OBが2009年にお孫さんに対し書かれた文章でしたが、一部加筆していただき、前編と併せて短信掲載となりました。今年6月、横須賀を訪ねた際に、山口OBにお会いし、多くの山岳写真集、部の古い資料(昭和20年代～)を寄贈していただいたばかりでした。その時の終始笑顔で色々教えて下さった山口靖二OBの生前のお姿を偲ぶとともに、ご冥福をお祈りいたします。(若林・記)